

# 平成 30 年度 入学者選抜試験問題

## 国 語

実施日時：平成 30 年 1 月 16 日（火） 9：00～9：50

\* 下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

### 〈注意事項〉

#### — 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに下記の 2 つの記入欄がある。その説明と解答用紙の「注意事項」を読み、2 項目のすべてに記入またはマークする。
  - ・ 受験番号欄 上段に受験番号を記入し、下欄にマークする。
  - ・ 氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を記入する。

#### — 開始後 —

1. 問題は 2 ページから 19 ページまでの各ページに印刷されており、第 1 問、第 2 問の 2 題で構成されている。  
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄へのマークによって行う。たとえば、

3
---

と表示のある問いに対して 2 と解答する場合は、次の〈例〉のように解答番号 3 の解答欄③をマークする。

#### 〈例〉

1	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
3	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

3. マークする際は HB の鉛筆でマーク欄を適切にマークすること。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後 30 分間および試験終了 5 分前は退出できない。

受 験 番 号

--	--	--	--	--	--



(問題は次のページから始まる)

## 第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本経済が本格的に高度成長期に入ったのが一九六〇（昭和三五）年のことである。経済成長につれ、日本の社会のヨウ<sup>(7)</sup>ソウ<sup>(7)</sup>は、物理的な環境の面でも生活様式の面でも大きく変化した。それとともに、子どもが生まれ育つ生育環境もまた大きな変化を遂げることになった。幸か不幸か、環境の変化に最も<sup>(1)</sup>ビンカンに反応し適応するのが乳幼児期および児童期にある子どもたちである。生育環境の変化は当然、子どもたちの成長の仕方、すなわち社会化の過程<sup>A</sup>に変化をもたらすことになった。

ちなみに「社会化」とは、ある社会に生まれたヒトの子が、その社会の正規の成員になっていくプロセスのことである。社会の正規の成員になるということは、平たく言えば、「まっとうな社会人になる」ということであり、日本で古くから言い習わされた表現をすれば、「一人前の大人になる」ことである。

このような意味での社会化の過程に変化がみられるということは、子どもたちの成長の仕方にこれまでになかった様々な変化がみられるようになったということである。このような変化は、異論はあるにしろ、少なくとも大人の視点からすれば、子どもの育ち方に何らかの変化がみられるとか、大人になっていく道筋に異変が起こったとか、社会化の過程が不全になったといった見方になる。

社会環境の変化に伴い子どもたちの成長の過程に異変が生じたとして、では、子どもたちの社会化に異変をもたらした生育環境の変化の核心を成していたのは、いったい何だったのか。

人間がそこで生き生活する環境は、大きく物的環境と社会的環境に分けることができる。物的環境は、さらに河川や森林などの自然と、家屋や高層ビルや道路などの建造物に分けることができるが、ここではイツ<sup>(7)</sup>カツシ「モノ環境」と呼んでおこう。一方、社会的環境とは、端的に言えば、そこに住む人びとのことであり、人びとの関係のありようのことである。それゆえ、ここでは「ひと環境」と呼んだ方がわかりやすいだろう。子どもの生育環境が大きく「モノ環境」と「ひと環境」であるとして、この両者とも、Xことは誰もが認めるところであろう。

( a )、どのような変化だったのか。まず「モノ環境」の変化について、結論を先取りして言えば、生育環境としての都市空間そのものが著しく無機質化し、無人化したということである。

今や日本で生まれる子どもの八割が都市部で生まれる時代である。その子どもたちが生まれ育つ空間から、日に、河川や田畑や山林が消えていき、代わりに、大量のセメントを使用して建造された建物や道路、橋などで覆い尽くされるようになった。

A また、普段の生活で頻繁に利用する空間に目を転ずれば、各種の店やコンビニはもちろん、駅や銀行や映画館やレストランなど、どこにも自動販売機や自動券売機が配備され、人の姿がみえなくなり、人と直に接触する機会が急速に減ってきている。

B 私の出した結論を言えば、子どもや若者たちの心象風景も、都市空間に呼応して、無機質化し無人化している、というものである。

C こうした空間に生まれ、そこで育つ子どもたちはどのような人間になるのか。

D 加えていえば、家庭生活の中をみても、そこには、テレビやテレビゲーム、洗濯機や冷蔵庫、エアコンや電子レンジ、そして、パソコンなど、各種の電化製品やIT機器がところ狭しと置かれている。

心象風景が無機質化し無人化しているとはどういうことか。次のような三つの特性を帯びているということである。

①心の中に描く現実の風景が、ガラスやコンクリート、メタル（金属）やプラスチックなどの無機質的な材質で組み立てられている。

②心の風景の中に、生きた生身の人間が存在しない。

③心の風景から、匂いや温度（ぬくもり）、変色やエグハイなど、物質の変化といった有機的要素を排除している。

子どもや若者たちの心の風景がこのような特性を帯びているとすれば、自分から進んで、生きた生身の人間（他者）に近づいて行き、その人と交流し、行動をとるとするという選択をすることは（甲）であろうことは容易に推測できる。生まれた直後からの他者との交流と応答によって他者を取り込み、そうすることで社会化を果たしていくという社会化の理論に照らすとき、無機質化し、無人化する生育環境で育つ子どもの社会化に異変が生じることになるのは、ごく当然の成り行きと言える。

では、「ひとと環境」の方はどうなったか。「ひとと環境」の変化という点からみれば、家庭内での人間関係と、近所での家族ぐるみの付き合い、地域での行事や活動への参加がどう変わったかを確認することがポイントになる。言うまでもなく、子どもにとって、<sup>B</sup>家庭と地域と学校は日々そこで生きている生活空間のすべてである。(b)、家庭と地域と学校の変化が社会化に与える影響は大きい、中でも、乳幼児期の子どもにとって家庭の変化はとりわけ大きい。

高度成長の加速する一九六〇年頃から四、五〇年の間における家族の変化もまた著しい。まず挙げられるのが家族構成員の変化である。もっと具体的に言えば、一世帯当たりの平均人数が五人から三人に減ったことである。

日本の一世帯当たりの平均人数は統計資料によって一八七三(明治六)年まで遡って調べることができるが、それによれば、一九六〇年までの約一〇〇年は平均五人でほとんど変化がなかった。それが、高度経済成長期以降は調査のたびに減少し、現在は平均三人を下回るまでになっている。平均三人ということは、祖父母や兄弟姉妹がおらず、父親と母親、それに子どもが一人という家族構成が普通になったということである。

家族構成がこのように変化したということは、家庭内での人間関係の絶対量が少なくなり、人間関係に多様性が乏しくなった分、質的にも大きく変化したということである。(c)、ヒトの子の社会化にとって最も重要な「他者の取り込み」を可能にする、多様な他者との相互行為が家庭内でも著しく損なわれることになった。

「ひとと環境」として見た場合、地域の変化もまた人間関係の減少と希薄化と言えるものであった。経済の高度成長は産業構造の変化によるものであり、第一次産業から第二次、第三次産業への変化は、農村部から都市部への大量の人口移動をもたらすことになった。その結果、農村部でのカ<sup>(4)</sup>ソ化、都市部での過密化をもたらすことになり、そこで生じたのは、ともに、生活共同体(コミュニティ)の崩壊であった。

都市部への移住によって人口が半分から三分の一にまで減った農村部では、それまで子どもも含めた地域の皆で行ってきた行事や共同作業などが成り立たなくなり、実質的にコミュニティはほぼ崩壊状態になった。また、新しく都市の居住者となった人びとが大挙して住むことになった都市郊外の巨大団地などは、地縁も血縁もないまま、互いに無関心を装い「隣は何をする人ぞ」といった状態に陥り、そこに新しいコミュニティが生まれることはなかった。壁一つ隔てただけの隣同士で住んでいたとしても、住人同士の間には日常的に何の付き合いも交流もなく、無関係であり続けていたとしたら、そこにはコミュニティは存在しないというしかない。

地域を、そこで生まれ育つ子どもの生育環境としてみた場合、そこに住みそこで暮らしている大人たちが（乙）に交流しており、大人たちの交流の中に子どもたちが取り込まれているかどうかがきわめて重要なことである。なぜなら、子どもの社会化の過程で決定的に重要なことは多様な大人たちとの直接的な交わり（相互行為）を通して、子どもたちの中に多くの大人が他者として取り込まれることだからである。こうして見たとき、生育環境としての地域もまた、子どもの社会化を促す要素を著しく欠くことになったと言えない。

子どもの生育環境の変化を「モノ環境」と「ひと環境」に分け、それぞれの核心を手短に述べたが、そこに共通にみられた変化は、子どもの社会化にとって最も重要な、他者との直接的な交流、とりわけ大人との交わりが極端に少なくなつたという変化であつた。

（出典 門脇厚司『社会力を育てる』より）  
 ※本文は、出典の記述を一部省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 1、(イ) 2、(ウ) 3、(エ) 4、(オ) 5

(ア)	ヨウソウ	①	相	②	装	③	壮	④	想	⑤	争
(イ)	ビンカン	①	賓	②	貧	③	敏	④	頻	⑤	便
(ウ)	イツカツ	①	克	②	活	③	滑	④	克	⑤	括
(エ)	フハイ	①	夫	②	普	③	負	④	腐	⑤	不
(オ)	カソ	①	租	②	祖	③	素	④	礎	⑤	疎

問二 空欄（ a ）（ b ）（ c ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

解答番号は（ a ） 、（ b ） 、（ c ）

- ① では
- ② しかし
- ③ また
- ④ こうして
- ⑤ それゆえ

問三 空欄（ 甲 ）（ 乙 ）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（ 甲 ） 、（ 乙 ）

（ 甲 ）

- ① あまりに贅沢ぜいたくすぎる
- ② 到底及ばない
- ③ 不可能と言わざるを得ない
- ④ 有意義な機会となる
- ⑤ きわめて乏しくなる

（ 乙 ）

- ① 日常的
- ② 一般的
- ③ 比較的
- ④ 規則的
- ⑤ 計画的

問四

空欄

X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

11

- ① 子どもの生育環境という点においてプラスにはたらいだ部分が大きい
- ② 日本が高度経済成長期に入った一九六〇年あたりから急激に変化した
- ③ 人間関係の希薄化が子どもにとってマイナスにはたらいだ
- ④ 子どもの社会化にとって弊害となる方向に急激に変化した
- ⑤ 二十一世紀に入ってから特に変化の度合いを加速した

問五

本文

の中のA～Dの文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、次

の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

12

- ① A ↓ D ↓ C ↓ B
- ② A ↓ C ↓ B ↓ D
- ③ B ↓ C ↓ D ↓ A
- ④ D ↓ A ↓ C ↓ B
- ⑤ D ↓ A ↓ B ↓ C

問六 傍線部A「社会化の過程に変化をもたらすことになった」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 13

- ① 子どもの成長に多大な影響を及ぼす社会において、物理的な環境や生活様式の面に大きな変化が起こったということ。
- ② 生活様式の変化によって、乳幼児期および児童期の子どもたちが社会の正規の成員になっていくプロセスに一部支障が生じているということ。
- ③ 経済成長によって物質的な環境や生活様式が大きく変化し、子どもが「一人前の大人になる」ことが不可能になったということ。
- ④ 子どもが生まれ育つ生育環境が変化したことによって、子どもが「一人前の大人になる」までの育ち方に変化が生じたということ。
- ⑤ 経済成長に伴う社会的環境の変化によって、子どもが生まれ育つ生育環境も変化し、大人になりきれない子どもたちが増加したということ。

問七 傍線部B「家庭」とあるが、家庭と子どもの関係についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

14

- ① 子どもにとって生活空間のすべてであり、身近で「他者の取り込み」を行うことができるため、子どもの社会化に与える影響が最も大きいものである。
- ② 高度成長期以前に著しく変化したものの一つであり、家族構成員の減少によって一人っ子が急激に増加している傾向は、社会化の過程が不全になっている証<sup>あかし</sup>である。
- ③ 家庭内での「他者の取り込み」を可能にして、他者との直接的な交わりを生むものであり、特に乳幼児期の子どもにとっては重要なものである。
- ④ 子どもの社会化にとって必要となる濃厚な人間関係を築くために重要なものであり、構成員の人格よりもその絶対量に重きが置かれるものである。
- ⑤ 子どもを取り巻く「ひと環境」において最も重要視されるものであり、多様な人間関係の中に身を投じることで子どもの社会性や協調性を養うことができるものである。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 15

- ① 子どもの社会化の過程に変化が生じたことは、大人から見れば、子どもが大人に成長していく社会的な過程に異変が生じたという見方になることが共通の認識となっている。
- ② 人間が生活する環境は、大きく「モノ環境」と「ひと環境」に分けることができ、子どもの社会化に影響を与えるという視点に立ったとき、「ひと環境」がより重要な役割を担っている。
- ③ 「モノ環境」が無機質化し無人化したことは、子どもの社会化の異変の要因の一つであり、そのことが「ひと環境」の変化にも一定の影響を及ぼすこととなった。
- ④ 一世帯当たりの平均人数が減少し、家族構成が変化したことは、近所での家族ぐるみの付き合いや、地域での行事や活動への参加の機会を著しく損ねる背景となった。
- ⑤ 都市部へ人口が流出したことによって、農村部では子どもから大人まで参加してきた行事などを維持できなくなり、都市部では隣人関係の希薄化が生じてコミュニティと言えるものがなくなった。

## 第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

声ほどではないにしても、手書きの文字もかなり個性的であり得る。手紙の上書きだけで裏を見なくても差出人のわかる人をだれでも何人かはもっているものである。これが印刷されていると、スタイル識別への手掛りが失われることになるから、印刷された文章を読んでも、署名がなければ、だれの書いたものか見当もつかないのが普通である。

声にも手書きの文字にも、癖があり、個性がある。( a )、印刷はそういう形式にあらわれる癖をほとんど消してしまふ。印刷文化が定着するようになると、個性を価値あるものとする考えがあらわれるのは、当然であろう。肉声や手書きの文字のそなえていた個人差が活字印刷ではどこにもあらわれない。どうしても、内面化した個性を求めることにならざるを得ない。それがスタイル、文体であった。

<sup>A</sup>印刷文化以前においては、いわゆるスタイルの概念はほとんど存在しない。むしろ、その逆のレトリックが表現の支配的原理であった。声や筆蹟ひつせきの差が当り前のところでは、個性を奨励するのは危険ですらある。なるべく統一へ収斂\*しゅうれんすることを心掛けなくてはならない。レトリックは公約数的表現を教えるものとして人々から久しく尊重されていたのである。

それが活字印刷の普及とともに事情は一変した。印刷はすべてのものを同じ型にはめて表現する。個人差を殺すものは困るから、レトリックは急速に<sup>(ア)</sup>スィビすることになった。それにひきかえて、スタイルと独創にきわめて高い価値が認められるようになって行く。印刷の形式的( 甲 )から脱出するために、内質的個性が強調されるようになったというわけである。

この間の事情は、文学史や文学研究の多くが印刷文化の時代に入ってから生まれたという歴史的背景も手伝って、十分に広く理解されているとは言えないように思われる。印刷文化の歴史はまだほんの短いものでしかない。印刷文化を人間文化と置き換え可能なものと考えことは明らかに誤りである。声の文化を忘れることは許されてよいはずがない。活字よ( 乙 )なかれ。

このごろアメリカの黒人にはアフリカ名を名乗ることが流行していると言うが、これは黒人の自覚と自信の表明だと見られている。かつての黒人は、なるべくありふれた白人の名前をとって自分の名前とした。目立ちたくない、

なるべく隠れていたい、という心理のあらわれだとカイ<sup>(イ)</sup>シヤク<sup>(イ)</sup>されている。人から差別されることを恐れる人間、目立つことが望ましくない人たちは、自分を隠す。コンプレックスをもつものは個性をあらわにしたりはしないものである。

印刷文化において、スタイルや独創が尊重されたからと言って、すべての人が個性的な自己主張に走ると考えるわけには行かないのは、このためである。(b)、世の中には自分を誇ることでできる人間より、恥じる人間の方がつねに多いものだ。

個人差におびえる人たちにとって、話し言葉よりも、印刷された言葉の方がずっと安全な隠れ場である。印刷文化の初期において、印刷につよい関心を示すのはアウトサイダーに多い。出版は青雲の志をいだけ人々にとってのトウ<sup>(ウ)</sup>リユウ<sup>(ウ)</sup>の門を意味した。すでに社会で確固たる地歩を占めているものにとっては、印刷はしばしば、うさん臭い存在ですらある。この傾向は現在のように高度の発達を見せている印刷文化においてもなお完全に払拭されているとは言えない。

ここで思い合わされるのは、十九世紀におけるスコットランド人のジャーナリストたちのことである。スコットランドの秀才たちはなまり——スコットランド人のハンディキャップ——を清算しよう、を合言葉のようにした。しかし、国の手形はそうやすやすと消えるものではない。英語のために一生苦労することになるのである。

スコットランド式アール(er)のなまりは容易に抜けないけれども、文章ならその気になればイングランド人と違わないがっちりしたものが書ける。そこで有為のスコットランドの青年たちは競って評論家になった。イギリスのジャーナリズムにとって、スコットランド人の貢献ははかりしれないくらい大きな意味をもっている。

<sup>B</sup>『エノノミスト』『スペクテイター』『サタデイ・レビュー』など十九世紀の代表的週刊誌の初代編集者はみなスコットランド出身であった。ジョン・グロスの『イギリス文壇史』によると、十九世紀中を通じて、エディターやエッセイストたちは「国境を越えて続々と南下してきたのである」。

スコットランドの秀才たちに英蘇<sup>えいそ</sup>国境を越えさせ、文筆の世界へ飛びこませたのは、方言のコンプレックスだったわけである。話し言葉ではどうすることもできないハンディキャップを書くことで隠すことができた。活字にすればいっそう完全にそれが消える。これはスコットランド人に限ったことではなく、近代印刷文化の発祥には大なり小なり同じような現象があったと考えるとよいのではあるまいか。(c)、自分を隠して、活字というマスクを

つけて、世に出ようとする地方出身者の気持がジャーナリズム、出版の原動力になったということである。

わが国でも、大新聞の発祥が関西に多いとか、出版社の創業者に、新潟とか長野とかのきびしい風土の土地の出身者が多いというようなことも偶然ではなからう。(1)

出版人やジャーナリストの出身がどこかという問題よりもいっそう重要なことは、彼らが心理的なマスクをつけたがって活字の世界へ引きこまれていたのではないかという点である。自分の素顔でなくて、近代文化の仮面をつけることによって新しい飛躍を夢見る気持が働いていると見る。(2)

実際の方言は捨てられなくても、心の方言——地方性は脱却したい。ここでは個性ということはまだ地平にあらわれない。活字というマスクをつけた近代人の目指すものが無署名性の表現になっていくのは自然の成行きである。それが広義のジャーナリズムに向うことになる。(3)

活字印刷が一方において、内質的個性をつよく求めながらも、なお、他面においては、没個性のマス・コミュニケーションへの志向をつねにはつきりさせているのは、このような社会的背景によって説明できるであろう。

活字というマスクをかけた近代文化は声かくぐもりがちである。

X

地方的伝統というものが無

表情な活字によって崩されて行く。肉声による連帯に代わって、印刷された表現による新しい別種の連帯が支配的になるが、声は地域的制限をもつのに対して、活字は自由はどこへでも広がって行く。それで活字文化は、地方性のプラスの面、伝統の破壊に手を貸すことになる一方、マイナスの面、固陋ころうと閉鎖を開放するという両刃の剣となるのである。(4)

これまで、印刷が表現の機会の拡大としてとらえられることが多かったこともあって、そのネガティブな機能が見すごされがちであったように思われる。印刷文化はただちに自己表現と結びつくものではなく、いったんは活字という無声の仮面によって自己を隠し、その上で、いわば変身した自己の表現をするというキョキョコウコウ性を秘めているのである。(5)

文筆において、ペンネームを用いることが多かったことは、右のケイケイイイを端的に示すものであると言ってよい。あらゆる表現方式のうちで、活字印刷は、おそらくもつとも個人的要素のあいまいになりやすい形式であることを、活字に馴なれ切ってしまったている現代人はときどき思い起してみる必要があるかもしれない。活字による個性的表現は、よほどの名作家でもない限り、肉声による味わいには及ばないのが普通である。

ギリシアの哲学者たちは、言語は対話の言葉こそ生きたものであり、文字はその影のようなものであると考えていた。活字はその文字のまた影のようなものでしかない。それを言語のすべてと考えたり、もつともすぐれた言語の姿であると錯覚したりすることがあるとすれば、それはすでにデカダンスと言うほかはないであろう。

印刷物がはんらんして、その弊害に目が向けられるようになって、ようやく、活字文化に対して醒めた見方をされる可能性がでてきた。活字という仮面を外すことが人間性の回復とどのようなつながるのか。人間疎外の状況が無声の文化といかに関係するか。こういうことを問うことは新しい印刷文化にとっての出発点になるはずである。われわれは印刷文化に対して両面的態度をとることのできる現状を、むしろ幸福と考えるべきであるかもしれない。

(出典 外山滋比古『ものの見方 思考の実技』より)

※本文は、出典の記述を一部省略している。

(注) \*レトリック：言葉を適切に使って表現する言語技術。

\*収斂：一つにまとまること。

\*アウトサイダー：社会の主流から外れている者。

\*有為：前途有望な才能を持っていること。

\*英蘇国境：イングランドとスコットランドの国境。現在はどちらもイギリスに属するが、かつては別の国で、合併後その名残があった。

\*固陋：ものの考え方が古く、新しいものを受け入れられない様子。

\*デカダンス：不健全な傾向。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 16、(イ) 17、(ウ) 18、(エ) 19、(オ) 20

	(ア)	ス イ ビ							
	(イ)	カ イ シ ヤ ク		①	酔		②	衰	
	(ウ)	ト ウ リ ユ ウ		①	流		②	隆	
	(エ)	キ ヨ コ ウ		①	興		②	構	
	(オ)	ケ イ イ		①	意		②	威	
							③	緯	
							④	違	
							⑤	位	
									③
									④
									⑤
									④
									⑤
									④
									⑤
									④
									⑤

問二 空欄( a )～( c )に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

解答番号は( a ) 21、( b ) 22、( c ) 23

- ① 例えば
- ② ところが
- ③ さらに
- ④ そして
- ⑤ つまり

問三 空欄(甲)、(乙)を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(甲) 24、(乙) 25

(甲)

- ① 協調性
- ② 融和性
- ③ 画一性
- ④ 消極性
- ⑤ 特有性

(乙)

- ① 目覚める
- ② すたれる
- ③ 驚く
- ④ おごる
- ⑤ 執着する

問四 空欄 X に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 26

- ① 声ははっきりしている間は保持されていた
- ② 多くの人が挙げる変革の声に後押しされ
- ③ かつては最も重要なものとして地位を確立していた
- ④ 声をおさえることで権威が保たれていた
- ⑤ 声をくぐもらせることで維持できていた

問五 次の一文は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。  
解答番号は 27

いずれにしても、社会の体制を大きくゆさぶらずにはすまないもので、活字文化と切り離した近代というものを考えることはできない。

- ① (1)      ② (2)      ③ (3)      ④ (4)      ⑤ (5)

問六 傍線部A「印刷文化以前においては、いわゆるスタイルの概念はほとんど存在しない」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 28

- ① 印刷手段が普及する前は、個性的なスタイルで文章をしたためる人が皆無だったから。  
② 癖や個性が出る手書きでは、個性的なスタイルを創造することが不可能だったから。  
③ 活字が誕生する前は、文章を書く際に個性を発揮するのは危険だと禁止されていたから。  
④ 手書きの文字自体に十分な個人差があり、スタイルで個性を出す必要はなかったから。  
⑤ 活字印刷が普及する以前は、個性的なスタイルや言葉の表現技術が重要視されていなかったから。

問七 傍線部B『エコノミスト』『スペクテイター』『サタデー・レビュー』など十九世紀の代表的週刊誌の初

代編集者はみなスコットランド出身であった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 

29
----

- ① スコットランド人には元来文才に長けた人が多く上、文章ならばスコットランド人特有のなまりを気にすることなくイングランド人と対等に仕事ができると考えたから。
- ② 印刷された言葉であればなまりを気にする必要がないので、イングランド人たちと遜色のない活躍ができると考えたスコットランドの秀才たちが、こぞって文筆の世界に身を投じたから。
- ③ スコットランド人の秀才たちが、ハンディキャップである方言のなまりを克服し、イングランド人と違和感なく仕事をするためには、文章の世界で働くことが一番の近道だったから。
- ④ スコットランド人のなまりは容易に抜けないが、文章ならばイングランド人と同様にしつかりしたものが書け、実際に国境を越えて住んでしまえば方言のコンプレックスも克服できたから。
- ⑤ 方言のコンプレックスと文章を書く才能が、一部のスコットランド人に英蘇国境を越えようという勇気を与え、実際に越境した人々の多くがイングランドで活躍することができたから。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 30

- ① 印刷文化の時代に入り、ほとんどの人が個性的な自己主張を望んでいるが、中には個人差におびえ個性を隠したいと考える人も若干ながら存在する。
- ② 日本においても新聞の発祥が地方であったり、出版社の創業者が地方出身者であったりすることが多い背景には、都会に対する地方の活字に見られるコンプレックスがないとは言えなくもない。
- ③ 活字文化は、地方が持つ伝統の破壊を促進するという一面を持っていたが、一方で地方が持つ古いものへの執着を解き放つ要素も持ち合わせていた。
- ④ 肉声による味わいに到底及ばないものの、活字を用いて個人的要素を表現するということは十分に可能であるということ、現代人も時々思い起こしてみる必要がある。
- ⑤ 印刷文化の負の側面に目が向けられるようになった現在、活字から脱却し人間性を回復すること、人間疎外の状況と無声文化の関係を熟慮しながら、伝統ある印刷文化を継承していくべきだ。